

ヨーロッパに胎動する2つの図書館

— Bibliothèque de France と British Library —

雑誌閲覧課 寺尾 隆

いま、ヨーロッパでは、誕生の時を待ち、胎動する2つの図書館がある。

ひとつは、現在建設中であるフランスの Bibliothèque de France であり、もうひとつは、開館を目前に控えた英国の British Library 新館である。

Bibliothèque de France

フランス図書館 (Bibliothèque de France = BDF) は、21世紀ヨーロッパの中心としてのフランスを意図するミッテラン大統領によって1988年夏、その基本構想が提唱された。

現在の国立図書館 (Bibliothèque Nationale = BN) は、長年老朽化と慢性的なスペース不足の深刻な問題を抱えて来た。また、利用の対象を大学院以上の研究者のみに限定している。BDF は、これにかわるものとして、高度の情報通信技術をはじめとするハイテクノロジー、ニューメディアの導入により、すべての人に、すべての分野の知識を提供し得る環境を実現し、さらには国内はもとより、ヨーロッパ全体を志向した開かれた最先端の情報センターを目指している。

翌1989年の国際コンペティションでフランス人建築家ミッシェル・ペロー氏の設計プランが採用された。そのプランは、非常に斬新なものであった。7万平方メートルの敷地の四隅に高さ86m、14階のL字型のガラス張りのタワーを、あたかも4冊の本が互いに向き合っているような形に配し、これを主に書庫

スペースとして使用する。そのタワーに囲まれた広場の中央に、地下に向かって長方形の庭園をくり抜き、その沈床園を取り囲むように閲覧スペースを設ける。さらに、館内各所は、自動配送システムで結ばれるというものである。

このプロジェクトも当初から順調に進んだわけではなかった。ユートピックすぎる、スペース利用が実際的ではない等の批判があり、利用者の拡大によって、資料保存に深刻な問題が起こるのではないかという指摘もあった。さらにフランス経済の状況悪化に伴い、膨大な予算を必要とするこのプロジェクトの実現を危ぶむ声もある。

現在、パリ東部の13区、セーヌ河左岸のベルシー橋とトルビアク橋間で、1995年の開館を目指し、建設が進められている。

メトロの6号線 Quai de la Gare 駅で降り、徒歩で5分ほどセーヌ河沿いに行くと建設現場がある。まだまだ基礎工事の段階ではあったが、完成後の姿を目前の工事現場に重ね合わせながらイメージしてみると、その規模の壮大さ、従来の図書館の概念を打ち破るユニークさは、十分に体感できた。いかにもフランスらしい選択だと言えよう。その完成が心待ちにされる。

続